

2025. 1. 12 (日) 使徒21:7~14

21:7 私たちはツロからの航海を終えて、プトレマイスに着いた。そこの兄弟たちにあいさつをして、彼らのところに一日滞在した。

21:8 翌日そこを出発して、カイサリアに着くと、あの七人の一人である伝道者ピリポの家に行き、そこに滞在した。

21:9 この人には、預言をする未婚の娘が四人いた。

21:10 かなりの期間そこに滞在していると、アガボという名の預言者がユダヤから下って来た。

21:11 彼は私たちのところに来て、パウロの帯を取り、自分の両手と両足を縛って言った。「聖霊がこう言われます。『この帯の持ち主を、ユダヤ人たちはエルサレムでこのように縛り、異邦人の手に渡すことになる。』」

21:12 これを聞いて、私たちも土地の人たちもパウロに、エルサレムには上って行かないようにと懇願した。

21:13 すると、パウロは答えた。「あなたがたは、泣いたり私の心をくじいたりして、いったい何をしているのですか。私は主イエスの名のためなら、エルサレムで縛られるだけでなく、死ぬことも覚悟しています。」

21:14 彼が聞き入れようとしないので、私たちは「主のみこころがなりますように」と言って、口をつぐんだ。

#### <説教>

使徒パウロと彼の同行者たちはツロまで来たことは先主日に見ました。エルサレムが一層近くなりました。そのツロの弟子たちはパウロがエルサレムで困難に会うことを聖霊によって示されたので、彼らはエルサレムに行かないようにパウロに繰り返し言ったのでした(4)。彼らは彼らなりの善意からそう言ったのですが、パウロたちは滞在期間が終わるとツロの港を出発して、エルサレムを目指しました。ツロの弟子たちは妻や子たちと一緒に家族総出で、パウロたちと海岸でひざまずいて祈り、別れました(5-6)。

パウロ一行はツロから 40 kmほど南のプトレマイスの港に着きました。船の停泊期間は一日だったようです。しかしそこでもパウロたちは主にある兄弟たちと会い、あいさつを交わしました(7)。

そして翌日にはプトレマイスを出発して、50 kmほど南のカイサリアに着きました(9)。そこでは〈あの七人の一人である伝道者ピリポの家に行き、そこに滞在し〉ました。〈あの七人〉とは、以前にエルサレムの教会で、やもめたちへの毎日の配給のため、〈食卓のことに仕える〉ために、使徒たちに代わって選ばれた〈信仰と聖霊に満ちた人〉たち七人のことです(6:1-6)。ピリポはその一人でした(6:5)。その中にはステパノもいました。そのステパノのことから〈エルサレムの教会に対する激しい迫害が起こり、使徒たち以外はみな、ユダヤとサマリアの諸地方に散らされ〉ることになりました(8:1)。〈ピリポはサマリヤの町に下って行き、人々にキリストを宣べ伝え〉ました(8:5)。そして主の使いに命じられてガザに下る道に出て、そこで御霊に命じられてエチオピア人の宦官にイエスの福音を伝え、彼に洗礼を授けました。更にピリポは聖霊に導かれて福音を宣べ伝え、カイサリ

アにまで行ったのでした(8:26-40)。それからかなりの時が経ちましたが、ピリポは家族を挙げてカイサリアの教会で中心的な働き手となっていたようです。

ピリポには〈預言をする未婚の娘が四人い〉ました(9)。預言の賜物を主から与えられた彼女たちは〈身も心も聖なるものになろうとして、主のことに心を配り…品位ある生活を送って、ひたすら主に奉仕〉(I コリント 7:34-35)していたのです。

さて、パウロたち一行の船での移動はカイサリアで終わりました。予定よりも日程に余裕が生まれたのでしょうか。カイサリアでの滞在期間は〈かなり〉長くなり、その間に〈アガボという名の預言者がユダヤから下って来〉ました(10)。彼は以前、預言者の一団の一人としてエルサレムからシリアのアンティオキアに下って来て、〈世界中に大飢饉が起こると御霊によって預言し、それがクラウディウス帝の時に起こった〉(11:27-28)、そういう人でした。

そのアガボがまたもや預言しました。しかも丁寧に〈パウロの帯を取り、自分の両手と両足を縛って言〉ったのです(11)。ことばだけでなく「動作」を加えて、象徴的に、また一層リアルに預言する仕方は旧約の預言(者)を思い起こさせるものでした。しかもそれらはみなイスラエルの民にとってはいわば悪い内容の預言でした。しかしここでアガボも〈聖霊〉によって預言しました。つまり、必ず実現される神のご計画、みこころを、その事実を語りました。そしてツロの弟子たち(4)とは違って、アガボ自身はパウロにエルサレムには上って行かないようにと言うことはしませんでした。

ここでアガボの預言を聞いてパウロを止めようとしたのは、〈私たち〉即ちルカを始めとするパウロの同行者たち、と〈土地の人たち〉即ちカイサリアの教会の人々でした。ルカたち、パウロに協力し、ずっと一緒に行動してきた人たち、パウロに一番く親しい仲間たちがここに来て初めて〈エルサレムには上って行かないように〉パウロに願うことになりました。そしてカイサリアの教会の中心的人物、あの信仰と聖霊に満ち、それまで大きな働きをして来た、そして今も働いている同労者ピリポと主に一心に仕えている彼の娘たちも加わりました。〈私たちも土地の人たちも〉いわば心一つになって、束(たば)になって、〈懇願(まごころから、親切に、丁寧に、切に、願うこと)〉し、願い続けた(口語訳)のです。パウロの身の安全を願った彼らの思いは本気、熱心でした。

それに対してパウロはどう答えが 13 節にあります。まず「あなたがたは、泣いたり私の心をくじいたりして、いったい何をしているのですか。」と言いました。ここでパウロは彼らの懇願に馬耳東風(心に留めず聞き流すこと)だったのではありません。否正反対でした。彼らの懇願はぐさりと、深くパウロの心に突き刺さりました。パウロは「あなたがたは『泣きつつ』、『私の心をくじきつつ』ある」と言いました。パウロには同行者たち、同労者たちの思いが痛いほど分かりました。彼らの懇願が口先ではなく、本気でまごころのこもったものだとは分かっていました。それゆえパウロの心は動揺していたのです。それは「あと一押し」で、「そうか、そこまで言われるなら、今回はやめておこう」となっても仕方がない、誰も文句を言わない、そんなぎりぎりライン、瀬戸際(せとぎわ)だったのでしょう。「いったい何をしているのですか」とは彼らを叱責していることばとも言えますが、それは同時にまさにパウロの側からの「懇願」でもありました。「パウロは彼らの涙に動かされなかったのではなく、それによって自分の決心が弱まるのを感じ、むしろ彼の方から彼らに思いとどまるようにと願った。」と、ある注解書にはあります。

しかしそれでもパウロは踏みとどまりました。「なぜなら、私は主イエスの名のためなら、エルサレムで縛られるだけでなく、死ぬことも覚悟しているからです。」と続けて言いました。これはもうひとえに主イエスの恵み、あわれみというほかありません。主イエスが、主の御霊、聖霊がこのとき改めてパウロに迫り、「主のみこころ」は何かを示し、パウロをお支えになったというほかありません。

このパウロのことばを聞いて、彼らも目が覚めました(14)。やはり同じ主イエスが、聖霊が働いて、目覚めさせてくださったのです。「自分たちのことばは、涙は、いくら本気で熱心で親切だとしても、ここではパウロの心をくじくものでしかない。なんと、主のみこころにかなうものではない。彼が聞き入れようとしないのは、彼の意地やわがままのゆえではなく、主イエスの名のゆえ、聖霊の迫りのゆえなのだ。」と悟らせてくださったのです。だから〈「主のみこころがなりますように」と言って、口をつぐんだ〉のは、決してパウロの「声の大きさ」とか「向きになった態度」にしぶしぶ押し切られたからではありません。彼らのことばのとおり「主のみこころがなりますように」ということ、「私たちもパウロとともに主の御意思に従います」という「信仰（の従順）による同意」によることでした。

私たちも毎日「主のみこころがなりますように」とこそ懇願し、祈りましょう。主の祈りの中でも「みこころが天で行われるように、地でも行われますように」と祈ります。それは、誰あろうこの私が、私たちが主のみこころの前に自分の意思を捨てて、主のみこころに全く同意し、従うことを行わせてくださいという祈りなのです。